

論文

明治期の社会学と国際関係論

——建部遜吾の対外観

猪原 透

1 はじめに

2 生い立ちと思想形成

2-1 父親からの影響

2-2 社会学との出会い

2-3 留学と西洋人への対抗意識

2-4 学問の独立

3 日露戦争と『戦争論』

3-1 『戦争論』の内容

3-2 ブロッホ『未来の戦争』とノヴィコフ『人間社会競争論』からの影響

3-3 「文明的戦争」と「国体」

4 おわりに

1 はじめに

近代日本における社会学は、いくつかの例外を除けば明治 10 年代におけるハーバート・スペンサーの社会学の受容に始まる。一般生物界と人間界を「進化」や「生存競争」などの概念を用いて重ね合わせるスペンサー社会学の視点は、自由民権運動の活動家やそれと対立する加藤弘之ら政府寄りの思想家の双方に影響を与えるなど、明治前期の思想状況にきわめて大きなインパクトを与えた（山下, 1983）。アカデミズムにおいても、アーネスト・フェノロサが東京大学でスペンサー社会学を教えたことを出発点として、外山正一の『民権弁惑』（1880 年）や有賀長雄の『社会学』（1883 年）などスペンサー社会学に依拠した著作が書かれた。彼ら日本社会学の第一世代に続いて登場するのが、本論文が検討対象とするたけべとんご 建部遜吾（東京帝国大学教授）である。

建部の存在はこれまで社会学史のなかでどのように位置づけられてきたのだろうか。この点を考察するうえで格好の材料を提供し、また建部に関する研究のなかでしばしば引用されるのが、直接彼の指導を受けた戸田貞三（1887-1955 年）の回想である。

第二次山縣内閣の時のことだったそうですが、ある時政府の役人が、日本の大学に社会学のようなものを置いてはいかんといった。すると山縣は、一体どこで誰が社会学をやっているのかと問うた。それは東京の文科大学で、建部という教授が担当してやっていきますと答えると、山縣は、「建部がやっているのか、それならいいじゃないか」といったので、その結果、社会学というものが潰れないで済んだのだというのです。¹

山縣有朋という明治政府を代表する人物により「建部がやっているのか、それならいいじゃないか」と評価され、戸田もそのことを怪しまない。戸田の目に映る建部は何よりもまず強烈な国家主義者であった。実際、建部は後述する七博士建白事件で日露早期開戦論を唱えたのを皮切りに、対外硬的な立場からの国際関係論や政治論をしばしば展開した。そのような建部の存在が官辺に安心感を与え、非国家的価値の自立が未だ生じていない明治期において社会学の存続を可能にしたことは林恵海が指摘する通りであろう（林, 1957）。

建部はまた、学会組織の整備においても大きな足跡を残した。東京帝国大学に社会学研究室を設置し（1903年）、米田庄太郎と協力して全国的な学会である日本社会学院を設立することで（1913年）、後進に研究成果を発表する場を与えた。しかし日本社会学院の活動は1920年代に入るころから衰退に向かい、それと共に社会学界における建部の存在感も薄れていく。主な原因としては、「社会学院の運営の仕方が専制的で、若い連中からいわせると面白くない」ため別に日本社会学会が立ち上げられたこと（戸田, 1953, p. 1374）、建部が東京帝国大学を辞職し（1922年）、政治活動に軸足を移していくことなどが挙げられよう。

それでも日露戦争から第一次大戦前後にかけての建部の活動には目覚ましいものがあった。彼が1912（大正元）年から1921（大正10）年のあいだに刊行した単著は10冊に及び、その間に『日本人』『外交時報』といった論壇誌や、地元の『新潟新聞』をはじめとする諸新聞に精力的に寄稿し、社会学の有用性を一般社会に向けてアピールした。また、先述した日本社会学院には大隈重信・後藤新平・近衛文麿といった政治家のほか、多くの官僚や経営者が会員に名を連ね、さながら政策シンクタンクのような様相を呈した。日本社会学院の年次大会の模様は新聞でも報じられ、その社会的注目度は高かったといえる。

では、こうした目覚ましい活動をみせた建部の社会学とはどのようなものだったのか。研究史で確認されていることの整理から始めることにしよう。

戦前から戦後にかけて、社会学史研究のなかで少なからぬ論者が建部の社会学について言及しているが、以下の3点についてはおおむね共通した評価が下されている²。第1に、建部は『普通社会学』全4巻（1904／1905／1909／1918年）を通して壮大華麗な社会学体

1 （戸田, 1953, p. 1367）。なお、第二次山縣内閣当時の建部は大学院を卒業し留学に出ていた時期であり、むろん教授ではなかったことを考えると、このようなやり取りが実際にあったのかは疑わしい。ただ建部の存在が戸田ら後進によってどのように位置づけられたのかをよく物語っているので、そのまま引用する。

2 （松本, 1932；新明, 1967；大道, 1968）など。

系を構築したが、それが固定化をきたしたため時代の変化に適応することができず、また若い社会学徒からも敬遠されたこと。第2に、建部の社会学はあまりに思弁的であり、経験的研究の積み重ねによる学問の発展には結びつかなかったこと。第3に、明治期のナショナリズムを背景に建部もまた国家主義的な立場をとったが、大正期の後半に至ってそれは過去のものとなり、その後の社会学には影響を与えなかつたこと。これらの否定的評価にはそれぞれ首肯し得る部分はあるが、建部とその後の社会学との違いを強調するあまり、建部社会学の思弁的性格のみが強調され、その具体的な内容にまで踏み込んだ検討は十分に行われてこなかつたように思われる。

こうした状況を大きく変化させたのは、川合隆男や左古輝人の研究である。川合は『普通社会学』全4巻を詳細に検討し、建部の社会学構想と体系化の試みは、儒学への強い関心に根ざしたものであることを明らかにした（川合, 1999）。建部が社会学の祖として知られるオーギュスト・コントに深い関心を寄せ、「社会学はコムトに創り、遼吾において大成す」と壯語したことはしばしば引用されるところである。しかしその関係は「コント社会学の受容」として簡単に整理できるものではなく、儒学（とくに陽明学）の枠組みへとコントを引き寄せ、「知行合一」の新たな学を構想するものであった。また左古は『普通社会学』のほか『陸象山』や『哲学大観』といった青年期の著作を取り上げ、建部社会学と儒学の関係をより詳細に検討している（左古, 2000）。建部の思想的基盤として儒学の存在を強調する川合に対し、左古は西洋諸学の流入により儒学が相対化されていく明治期の思想状況に注目する。建部にとって儒学もまた所与の前提であったわけではなく、西洋諸学の視線を通して再構成されたものであった、というのである。

以上のように、近年の社会学史研究では建部社会学を単に大正期以降の社会学の前史としてのみ捉えるのではなく、西洋諸学と儒学の複雑な交流のなかで形成された、独自の個性を持つものとして捉える見方が定着している。また、建部とその後の社会学の違いを過度に強調する従来の見方に対しても、国家主義と社会学の結合は建部に限られた話ではなく、「昭和終戦時までの近代日本社会学のひとつの底流であったと位置づけることができるのではないだろうか」（川合, 1999, p. 31）という問題提起がなされている。その一方で、建部が多大な精力を注いだ国際関係論については「社会学史」の枠組みでは扱いにくいこともあり、十分に論じられることはなかった。

この状況を再び変化させたのが、春名展生の研究である。春名は加藤弘之一有賀長雄一建部遼吾という社会学者による国際関係論の系譜に注目し、国際関係という対象が当初から政治学に囲い込まれていたわけではなく、表面上は「無政府状態」に近い様相を呈する国際関係は「社会」と類似するが故に、社会学の領分とみなされていたことを明らかにした（春名, 2015）。建部の場合、「無政府状態」としての国際関係（国際社会）を理論的に分析するための切り口をいかなる点に求めたのか。人口の増減、とくに「過剰人口」の圧力がそれにあたる。春名が建部の多岐にわたる言論活動に「人口」への関心という一貫したモチーフを

見出したことで、それまで単に「思弁的」と片づけられることの多かった建部社会学が、実はきわめて具体的な問題を念頭に置いたものであることが明らかとなったといえよう。

本論文は以上の先行研究にそれぞれ多くを負っており、とくに西洋諸学と儒学の複雑な関係に目を向けるという点では川合・左古の問題提起を、建部の国際関係論に彼の社会学のエッセンスがあると考える点では春名の問題提起を引き継いでいる。それでもなお、建部論として何か新しい貢献が可能であるとすれば、それは以下の 3 点においてではないかと思われる。

第 1 に、彼の社会学と国際関係論の形成過程を詳細に分析すること。建部の社会学はいわゆる「総合社会学」であり、これは自然科学も含む諸学問の成果を基礎として、その総合を図るものであった。儒学もまたそうした諸学問の一部であったこと、オーギュスト・コントが総合社会学のモデルとされたことについては研究史が明らかにしているところである。だが、コント以後の、建部にとっては同時代の社会学を建部がどのように受け止め、いかなる取捨選択を施したのかについての検討は手薄である。この欠落を補うことで、建部の学問を同時代の知的動向のなかに位置づけることができると思われる。

第 2 に、建部が日本人として社会学に取り組むことに対するどのような意味づけを行ったのかを明らかにすること。周知のように近代日本において人文・社会に関する学知は国民国家の形成と植民地統治のための方策を提供するという政治的役割を否応なくもたされており、特に帝国大学においては「国家ノ須要ニ応スル」ことがその使命とされていた（帝国大学令第一条）。建部はいかにしてその使命に応えようとしたのか。この点を明らかにすることで、彼の多方面にわたる研究活動を統一的に捉えることが可能となるであろう。

第 3 に、建部の社会学と国際関係論が、同時代のナショナリズムや帝国主義の潮流とどのように結びついていたのかを詳しく検証してみること。後述するように建部の思想の背後には西洋諸国による日本の植民地化に対する強い危機意識が存在しており、彼の社会学はこうした危機を克服するための政策提言に他ならなかった。たしかに、これまでの研究史においても建部が戦争の発生を不可避と考え、それに勝ち抜く必要を強調してきたことは春名の研究において触れられている。しかし、建部の戦争論と、政治や文化に関する発言と関連づけて論じる作業には、まだ多くの余地が残っているように思われる。春名が指摘するような戦争に対する建部の強い関心も、彼の日本社会の現状に対する認識と関連づけることで、はじめて十分に理解できるのではないだろうか。

なお、本論文が取り上げる時期だが、建部の思想形成を明治という時代状況との関りから分析するために、起点を彼の幼少期に置く。そして建部が日露開戦論によって一般社会の注目を集め、戦中から戦後にかけて広い意味での国際関係論を展開した時期を主に扱う。以上の時期にわたる建部の社会学と国際関係論、そしてそれら基底にある对外観を検討することにより、社会学者である建部がどのような論理で現実政治への批判を試みたのか、またその对外観から明治期の思想史の理解にどのような示唆が得られるのかを論じたい。

2 生い立ちと思想形成

明治期における思想家の政治的態度や対外観の形成において、家族（とくに父親）、学校教育、そして留学経験が大きな役割を果たすことはしばしば見られるが、建部の場合もそれは妥当するように思われる所以、我々もこの3点の検討から出発することにしたい。

2-1 父親からの影響

建部遜吾は1871（明治4）年3月、新潟県中蒲原郡横越村で建部貞夫（号・蔵軒）の五男として生まれている。建部家は旧新発田藩領横越村の大庄屋を小林家と交代で務める地元の名家であったが、祖父の放蕩と明治維新前後の社会的混乱、そして家督相続をめぐる家の分裂によって財産を大きく減らしていた。こうした状況のなか、建部家に婿養子として入り、家の立て直しに奔走したのが遜吾の父・貞夫である。

建部はのちに父の遺稿集をまとめており、その序文で父を「児孫にとりての指南車」、「衆星の拱ふ所」³になぞらえて賞賛していることから（建部貞夫, 1935, p.序12）、建部の思想形成に父の影響があったことは十分想定できる。なお、遺稿集『蔵軒残稿』には漢詩文や和歌、日記などに加えて、いくつかの評論が収録されているので、その内容を確認したい。このなかで貞夫は「人は各家々の歴史ありて今日に至れるものなれば、必しも範を他に取らす、又俗論に雷同せず、自機宜を制せんことを要す」と述べ、自家の歴史を踏まえた家則をつくり、それによって家の規律を整える必要を唱えている（建部貞夫, 1935, p.3）。その一方、嫡子相続や隠居制の「習俗」が近年に創作されたものにすぎないこと、またこれらの「習俗」が人々の依頼心を助長することを指摘し、家族のそれぞれが独立の気概を持つべきだと主張している（建部貞夫, 1935, pp.9-16）。研究史が明らかにしたように、遜吾は儒学のような「伝統」を再構成したうえで西洋諸学を受け止める基盤としたが、こうした学問態度の形成にあたっては父からの影響が少なからず作用しているのではないだろうか。

なお、漢学者の青木青城に師事した教養人でもある父は楽律の研究を趣味としており、幼少期の遜吾もその手伝いをしていたという（建部貞夫, 1935, p.序12）。楽律とは儒学思想を背景とした一種の音楽理論であるが、その意図するところは、律すなわちリズムを媒介として、自然から政治的秩序までを統一的に把握し、音楽の作用によってこれを整えることである。かかる楽律を幼少期に学んだことは、文化的現象に対する進化論の適用、政治における文化政策の占める位置の強調といった、遜吾の思想の基本的な特徴が形成される前提になったと見るべきであろう。実際、遜吾は文科大学卒業後まもなく「韻文進化論」（建部, 1897）

3 『論語』為政編の「子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」を踏まえた表現（鄭注では共を拱と同じと見る）で、父を北極星（=人心の帰宿するところ）に例えている。

を発表し詩樂の「進化」について論じるのであるが、その到達点（理想詩）として提示されるのは樂律的な詩樂であり、詩樂を宇宙や生命のもつ自然のリズムと関連づけて捉える視点や、東洋では伝統的に詩樂による民衆教化が行われてきたことを肯定的に評価しようとする姿勢が顕著である。その意味で建部の社会学は、礼と樂こそが社会秩序を維持する要とみる儒学的思考の流れに連なるものと言えるだろうが、西洋においても「樂」の類似物があると見ていたので（建部, 1897, pp. 35-37）、儒学に特別な地位を与えようとしていたわけではない。

2-2 社会学との出会い

建部は横越小学校、横越高等小学校を卒業後、姥ヶ山尋常小学校授業生（代用教員）を短期間務めたのち、村の豪農である玉井貞太郎から育英資金の支援を受け、1888（明治 21）年4月に上京、東京専門学校・東京物理学校・東京三語学校・大成学館に通い物理学や語学を学んだ。また第一高等中学校を1893年7月に卒業すると、ただちに帝国大学文科大学哲学科に入学した（田村編, 1965）。同年に史学科に入学した幸田成友によると、文科大学生のころの遜吾は口を開けば「プラトン曰く」といい、友人らはそれをもじって彼を「タケトン」と呼んでいたという（幸田, 1948, p. 133）。のちに国家主義的な社会学者として知られる建部としては奇異に聞こえるエピソードであるが、少なくとも当時の彼が西洋哲学を真剣に学んでいたことは間違いない。

建部が社会学を学び始めた経緯については不明な部分が多いが、のちに彼自身が書いたところによると、文科大学卒業（1896年7月）後に外山正一を指導教員として社会学を専攻することに決めたが、それまでにも外山の講義を2年間受けてきたという（建部, 1904a, pp. 序 1-2）。明言はされていないが、社会学講座の後継者を求めていた外山からの誘いを想定することは十分に可能であろう。

なお、外山の講義について建部自身が触れた史料は見あたらないが、建部と同級生の姉崎正治によると、「スペンサーの社会学に基いたものの間に、キッドの『社会進化』についての講義があった」という（姉崎, 1974, pp. 59-60）。ベンジャミン・キッドは現在ではほとんど読まることのない社会学者であるが、明治期の日本では比較的よく知られた存在であり、外山が取り上げたという『社会進化』*Social Evolution* (1894) も当時注目の一冊であった（住家, 2013）。キッドは同書で社会をひとつの有機体と見、有機体相互の競争を社会進化の原動力とみなすとともに、有機体の結合を強める宗教の機能に注目している。人間は理性を発達させたことで功利的になり、社会よりも個人の利益を優先するようになる。この傾向を抑え、社会に人々を結びつけるのが宗教の機能だ、というのがキッドの主張である。建部のキッド評価は今のところ不明であるが、宗教を機能としてとらえる発想が、彼が学生時代に学んだ社会学において既に打ち出されていたことをここでは押さえておきたい。

渡辺浩によると、明治期の知識人の多くは西洋における宗教の繁栄に驚くとともに、それを儒学的な意味での「教」の一種として理解したという（渡辺, 2005）。要するに確信的な世俗主義者である彼らは「進んだ文明をもつ西洋において、なぜ非現実的な教義をもつキリスト教が信仰されているのだろうか」と怪訝に思い、やがて「愚民を善に導くための手段（=教）」として理解するに至ったのである。儒学的素養をもった当時の標準的な知識人から見れば、西洋において教養あるエリートがキリスト教を信じているという事態は不可解であり、愚民を教え諭すための方便として見ることでようやく理解可能となった。かかる宗教観にもとづく視線が日本で活動する外国人宣教師に向けられたとき、彼らが日本を精神的に支配しようとする植民地支配の尖兵として映るのは避けがたかった。

父を通して儒学を学んだ建部もその例外ではない。たとえば第一高等中学校の校友会誌に発表した論説では、西洋は「吾道徳界ヲモ侵略」しており、「實ニ幾多ノ宣教師ト共ニ幾十派ノ基督教ヲ我精神的社會ニ輸入」したことはその実例であると述べている（建部, 1891, p. 18）。建部の社会学、とくに『戦争論』はこうしたキリスト教観の理論化という側面があるのだが、この点については3節で触れる。

さて、これも研究史のなかでしばしば引かれるものであるが、文科大学卒業後に外山と交わした会話のなかで、建部が社会学のいかなる分野を専攻するかについて述べた言葉を改めて引用しておきたい。大学院の専攻は大学院在学中に研究し終えられるものにすべきであるから、社会学そのものを専攻とするよりは、社会学中の一事項を選んで専攻とするのが適当であろう、という外山の提案に対し、建部は次のように応答した。

社会学や、既に文科大学の学程に於いて二年間講筵に陪し、傍ら東西古今の先学の述作について、聊か看る所ありしも、学科其物の猶未だ充分に発達せざる、体系の一定して整然たるなく、問題の確立して答解を促すなし。乃ち今や社会学の研究は、社会学其物の全般的基礎的研究より始むるを要す〔中略〕抑々又斯学の幼稚なる、其部分的研究を以て大学院生を煩すの域に到らざるのみ。大学院に入るの研究上便宜にして順当なるは言を待たざるも、而もこれが為に生が至当なる規模と信する所を枉げて、学程の一変更を試むるは、生の能くせざる所なり。（建部, 1904a, pp. 序 1-3）

外山の提案を建部は拒絶し、あくまで社会学そのものを専攻することを主張する。その理由として挙げられているのは、社会学が未確立な学問であり、だからこそまず「全般的基礎的研究」にとりかかる必要がある、というものである。社会学が未確立な学問であるからこそ着実な成果が見込める「部分的研究」から着手するという判断も十分あり得たし、建部もそれが「大学院に入るの研究上便宜にして順当」であることは認めるのであるが、「全般的基礎的研究」によって「問題の確立」を促し、研究の方向性を定めることの方がより重要であると考えた。

とはいっても、上記の回想は大学院入学から 8 年後に書かれたものであるから、当時の心情が多少誇張されている可能性も考慮してみるべきだろう。大学院に入学した年度の冬には、やはり当時注目の一冊であった Small & Vincent の *An Introduction to the Study of Society* (1894) を『哲学雑誌』で詳しく紹介し、末尾で次のように述べている。

我学界一般の社会学に関する観念は、スペンセルに非ざれば則ちワードなり、グムプロ井ツツに至りては之を言ふ者既に少し、況やタルス、ドモオル、ヲルムスをや。蓋しスペンサルは斯学一期の大成者なりしも、爾後学界は既に四半世紀の星霜を閲歴したり、ワードは其題既に動学的社会学といふに在りて、斯学の全体系は今や其孜々として構成に勉めつつある所。〔中略〕固より少壯なる学科の常とて、体系其自身に關し異見亦多からざるを得ず。若しうれ其主要なる者は出つるに隨うて之を我学界に紹介するに怠らざるむとす。(建部, 1896, pp. 1003-1004)。

個々の人物に関する説明は省略するが、海外では次々と新しい社会学体系構築の試みが現れていること、いまだ確固とした体系は存在せず「異見」が乱立する状況にあることを断ったうえで、社会学体系に関する主要な著作を順次紹介していくと述べている。おそらく建部は、社会学の「全般的基礎的研究」において大きな変動が生じつつあり、いまだ「スペンセル」(Herbert Spencer) や「ワード」(Lester Ward) に留まっている日本の社会学もこれに遅れないようにしなければならないと認識していたのだろう。

ただしその一方で、社会学そのものが「少壯なる学科」であり、欧米においても確固とした体系は存在していないという冷めた認識を抱いていたことも重要である。この二つの認識のうち、前者は建部が『普通社会学』の第 1 卷を刊行する 1904 年までには後景に退き、むしろ日本の社会学がいかにして「体系の構成」という欧米の社会学と共通の課題に貢献するかという問題が語られるようになる。こうした変化はおそらく彼の留学経験と無関係ではないだろう。

2-3 留学と西洋人への対抗意識

先述したように建部は 1896 (明治 29) 年 7 月に文科大学を卒業し、翌 97 年 4 月には大学院に入学、外山正一を指導教員として社会学を学び始めた。ところが同年 11 月に外山が東京帝国大学総長に就任したため、社会学講座を高木正義とともに担当することになる。さらに翌 98 年 6 月には 3 年間のドイツ留学を命じられ、同年 8 月に日本を出発する。帰国後、建部はこの留学経験をまとめて『西遊漫筆』として刊行しているので (建部, 1902)、主に同書に依りながら、彼が留学を通していかなる視点を獲得したのかをみていきたい。

フランス・マルセイユから欧州に上陸した建部は、パリを経由してドイツ・ベルリンへと

移動し、当地のベルリン大学に籍を置いた。そしてベルリンを拠点にドイツ各地やオーストリア、ハンガリーを見てまわっている⁴。当初の留学計画では3年間をドイツで過ごす予定だった。ところがベルリンに到着して1年ほどが経過した1900年初頭、建部は文部省にパリへの転学願を提出し、その返事を待たずにパリへ渡る。文部省からの返事は「不許可」であったが、建部はそのままパリにとどまったという⁵。この騒動がいかなる決着を迎えたのかは不明であるが、結局建部はその後、約1年にわたってソルボンヌ大学に籍を置き、パリを拠点にフランス国内やイギリス、ロシアを見て回り、1901年3月にパリを発った。帰りはアメリカを経由し、同年10月に日本に到着している。

留学中のこうした奔放な行動の背景には、いったいどのような考えがあったのだろうか。まず指摘できるのは、彼が留学先の大学の講義にほとんど関心をもたなかつたことである。留学に際して開かれた送別会の記録によると、建部は留学中の研究方針として「講義を聴くこと」「書物を購入すること」「実地の観察を為すこと」の三つを挙げたうえで、次のように述べたという。もっとも力を注ぐべきは実地の観察である、講義に力を入れる学者は少なく、学者が心力を傾注し後世に残そうとするのは著作であるが、これすら吾輩は満足することができない、まして講義に傾聴の価値があるだろうか、と（無署名, 1898, p. 668）。当時、留学先のベルリン大学ではゲオルグ・ジンメルが教鞭をとっており、建部も彼の講義を受講しているのであるが、日本に送った通信では「社会学者として推服するに足る学者は一人も無之」と述べ、ジンメルについても「規模の甚だ大ならざる」ことが弱点であると簡単に片づけている（無署名, 1899, pp. 76-77）。社会有機体説に立脚する建部が、かかる立場を否定して形式社会学を創始したジンメルに共感を覚えなかつたことは当然としても、上記の研究方針もまた両者の対話を妨げたように思われる。

また、建部がオーギュスト・コントに多大な関心を寄せたことは研究史が明らかにしている通りであり、フランス社会学への関心が転学の動機になったことは一応想定できるにしても、転学後も大学の講義に関心を寄せた形跡は見られない⁶。やはり西洋各地を見てまわる「実地の観察」が留学の主目的であり、その範囲を広げるためにドイツからフランスへ転学したと考えるのが順当であろう。

このような講義への関心の薄さは留学前からのものであるとしても、実際に大学の講義を聴講し、またドイツではギナジウムを、フランスではリセやコレージュを、イギリスではパブリックスクールを見学することによって、講義の質においても学生の質においても日

⁴ 官費留学であるから渡航・滞在費には不足しなかつただろうが、ドイツ各地やオーストリアなどへの移動費用については別途確保する必要があつただろう。この点については明確に述べられていないが、留学前に建部は複数の著作を出版し（『陸象山』『哲学大観』）、また留学前から留学中にかけて郷里の『新潟新聞』に評論を寄稿しているから、これらの報酬が充てられた可能性が高い。

⁵ 同時期にドイツに留学した箕作元八の日記（井出・柴田編, 1984, p. 111）による。建部にとってもおそらく予想外の事態であり、当然許可されるものと見ていたため、返事を待たずに移動したと考えられる。

⁶ ポルドー大学で教鞭をとっていたエミール・デュルケムと面談したことを書き残しているが、その際のやり取りや感想などは記していない（建部, 1902, p. 304）。

本は西洋諸国に劣っていないという確信が得られたことは、やはり留学の収穫であった。「伯林大学学生の風は、概して遊惰」であり、「到底我大学高等中学等に比すべくもあらず」、彼らは「大学学生期を尤も気楽なる時期と思做」しており、「聴講に出席するは、講義の始と終と、すなわち教授の署名を台帳に受くるの時」だけであるという（建部, 1902, pp. 191-192）。もちろん、建部も「老儒碩学の多きを以て」西洋の大学が依然として日本の大学よりも優れていることは認めざるを得ないのであるが（建部, 1902, p. 72）、講義の質も学生の質も西洋と日本とでは大差ない以上、次のような現状は建部にとって憂慮すべきものであった。

邦人の此地に遊びてドクトルを博取する者、大概試験論文の題目を東洋の事項に取る、曰はく「教育者孔夫子」、曰はく「万葉集の美学」、曰はく「日本貨幣制度の沿革」、この類皆欧人の未だ知らざる所、而して試験は則ち容易に通過すべし。一旦帰朝する、或は自ら博士と呼び、大博士と称し、俗衆と学界と、共に瞻仰敬畏す、何ぞ其迂なるや。学問の独立、識者思はざるべからず、日本学士の体面、遊学の徒省ざるからず。（建部, 1902, p. 72）

西洋人と同じテーマで知的競争を挑むことを回避しながら、日本国内では自ら博士と称してはばかりないのはおかしいではないか。このように建部は日本人留学生を激しく非難するのであるが、それに続けて彼が「学問の独立」を持ち出しているのは唐突な印象を与える。この点について理解するためには、やや遠回りとなるが西洋文明に対する彼の認識を改めて確認しておく必要があるだろう。

2-4 学問の独立

先にも触れた様に、建部は学生時代からキリスト教をはじめとする西洋文明の流入に対して警戒心を抱いていたが、留学経験もこれを緩和する方向には働くが、むしろ強めることになった。フランス滞在中に見学した教会付属の墓地の広さに驚き、日本にやってくる宣教師が仏教寺院の「墓地建碑を以て迷信と為す」のは目障りな仏教寺院を排撃するための方便に違いない、と推測しているのはその一例である（建部, 1902, p. 264）。

また、建部はイギリスでフレデリック・ハリソンと面会し、その際のやり取りを詳しく書き残していることも注目に値する。現在ではハリソンはほぼ忘れられた存在であるが、当時はオーギュスト・コントの社会学を基にした大英帝国批判を展開した実証主義者の代表的存在として、イギリスでは著名な人物であった。ハリソンら実証主義者はイギリス社会の改革を訴える一方、植民地支配に向けられたエネルギーを国内改革に振り向けるべきだと考えていた。こうした立場から、イギリスの帝国主義および帝国主義と結びついた布教活動を

批判していたのであるが⁷、建部がハリソンらに抱いた共感は、何よりもこの点に向けられていた。建部はロシア出身の社会学者ノヴィコフと対比する形で、次のようにイギリス実証主義者を好意的に取り上げている。

露国オデッサ大学の教授ノギコフ氏は、「人間社会競争論」を著して、流石にお国柄だけに、人の國を滅す方法を学問的に列叙せる中に宗教の滅国作用を詳説し、英國の實理〔實証——引用者注〕主義派は、我仏教徒の「世界の宗教者に告ぐる檄」に賛して、支那事件〔北清事変——引用者注〕に対する耶蘇教の不良なる作用を痛責せる次第に候。
(建部, 1902, p. 460)

ノヴィコフについては 3 節で取り上げるが、建部は北清事変におけるイギリス実証主義者の言動を例に挙げ、彼らを学問的立場からのキリスト教批判者として位置づけている。留学中にノヴィコフの著作やイギリス実証主義との接触をもつたことは、彼がもともと抱いていたキリスト教への警戒心を一層強めると共に、これへの対抗策を講じることが社会学の課題であるという認識をもたらすことになったと言えよう。

建部はこうしたキリスト教への警戒心を出発点として、西洋文明の流入全般を、西洋による精神的侵略の方策とみる立場を固めていった。たとえば留学中に執筆した博士論文を基にした『普通社会学』第 2 卷では「社会化」というテーマが論じられているのだが、具体的には以下のような内容である（建部, 1905a, pp. 401-412）。

社会の存立は人々を結びつける結合力（社会性）を基礎としているが、これは本来、各社会の文化的性格と密接不可分なものである。そこである社会が別の社会を侵略しようとする場合、自社会の「国語、宗教、風俗、慣習」を移植することで結合力を変質させ、自社会と一体化させようとする（積極的社会化）。この侵略は「社会的抵抗力」が強ければ怖れるに足りないので、別の社会を侵略しようとする場合、意識的にその抵抗力を弱めるための方策がとられる（消極的社会化ないし国性剥奪）。国家制度の破壊のほか、現行の「言語、宗教、風俗、慣習」の禁圧がそれにあたる。つまり社会を存続させていくためには、異なる社会からの積極的・消極的社会化を警戒しつつ、自社会の抵抗力を高めていくことが必要である（自衛的社会化）。

なお、建部にとって日本社会の文化的性格とは、究極的には「尊王心」に集約されるものであったらしい。「其國勢の堅実を保つ」のは「国民の社会的性格」であり、それは「衆個人を結合し一社会を形成する」ための「心的結合性」と言い換えられる（建部, 1902, p. 91）。日本の場合は「尊王心」がそれにあたるというが、しかしこの尊王心は「族制組織」すなわち血族関係にもとづく単純な社会組織のなかで生まれたものであり、「之を複雑なる社会に

7 イギリス実証主義者の活動に関する概説は（光永, 1997）を、ハリソンのもとを訪れた日本人について（Mitsunaga, 1992）を参照のこと。

期す可からず、之を長い年月に期す可からず」(建部, 1902, p. 92) とされる。つまり日本社会は尊王心によって結合を保っているのだが、その尊王心は天皇との血族関係が社会組織の基礎にあった時期に生まれたものであり、近代のような複雑な社会において維持することは困難であるという。したがって最近の尊王心の高まりも「百世の恒事に非ず」とされるのだが、それでも「尊王心の我社会的性格の中核」であることは不変であり、「礼儀、美術、教導、三種の社会教育」によって尊王心を絶えず高めていく必要があると結論される(建部, 1902, p. 93)。こうした関心は留学からの帰国後も維持され、「教育勅語」や「戊申詔書」によって象徴される「国体」論として展開されることになる。この点については次節で取り上げることにしよう。

こうして見ていくと、建部が「学問の独立」を重要視した理由は既に明らかであろう。彼にとって社会学を含む西洋諸学は、それがあくまで西洋社会に出自を有するものである以上、その移植は西洋による日本への精神的侵略の問題と表裏一体の関係にあった。そのため建部は、後述するように自らが高く評価するノヴィコフやブロッホの社会学研究に対して、それが彼らの出身国であるロシアの「過去現在の常用国策の反映」であり、ロシアが異なる社会を侵略するための方便なのではないかという疑念を拭い去ることができなかった(建部, 1903a)。

では、建部自身はいかにして「学問の独立」を守ろうとするのであろうか。明治初年生まれの青年には珍しくないことだが、建部は明治という時代を「世界文明の発達の新局面の開け」、日本人にとっては「鵬翼を伸はすの好舞台を得るに至れるもの」と捉えていた(建部, 1898a, p. 7)。これに対して「維新前の国学者漢学者」は「皆時勢の激変に応じて活潑自在なること能はずして乃ち以て思想界に於ける臨終を遂げ」たと評されており(建部, 1898a, p. 8)、西洋諸学を闇雲に拒絶する立場を建部が採ろうとしないのは明らかである。一方、「洋学者の一流」のように西洋諸学を徹底して学ぶことは、西洋文明による精神的侵略に対して無警戒となるので、これも建部が採るところではない。「洋学者の一流」を批判して現れたのが「国粹主義及東洋論者」であるが、建部はこれにも批判的である。彼らは一見すると洋学者と対照的な立場をとっているようだが、実際は「欧西の思想界称して哲学といふ者ありといへば則ち曰ふ東洋にも亦夙に哲学ありと欧西に美学ありといへば則ち曰ふ東洋にも亦夙に美学ありと」言っているに過ぎないもので(建部, 1898a, p. 9)、西洋に遅れまいとする洋学者と変わるところがないという。先に見たように建部は日本人留学生が「教育者孔夫子」「万葉集の美学」、「日本貨幣制度の沿革」といったテーマで博士論文を書くことを激しい調子で批判しているが、その背景には西洋人との知的競争を回避することへの違和感に加えて、上記のような認識があったのではないだろうか。

そこで建部が注目するのは「国語」である。留学先へと向かう船中で書かれた論説「語学者の急務」では、「人文の発達するや、其枢要なる機關たる言語は、次第に之に伴うて発達し、複雑繁密に赴かざるを得」ないものであり(建部, 1898b, p. 2) また「標準的文法の制定

は〔中略〕国家の公則を立つる者」であるから、フランスの「学士会院」のような機関によって日本語の「標準的文法」を制定し、同時に「学術語の一定」を図るべきだと主張されている（建部, 1898b, p. 5）。かかる主張と「独立」に対する危機意識が組み合わさることで、『普通社会学』における以下のような方針が生まれることになった。

国語の独立は学問の独立及社会の独立の一大要素なり。本著は一切の外国語を排斥して、悉く国語を以て充つる所あり、其古来既に存せる者は仍りて之を用ゐ、其未だ存せざりし者は、既に存せる者を成分として、忌憚なく新語を組成せり（建部, 1904a, p. 序4）

「国語の独立」が「学問及社会の独立」を支える。したがって読者に多少違和感を与えたとしても、学術書は「国語」によって充たされなければならない。建部は必ずしも「国語」を静態的に捉えていたわけではなく、「人文の発達」に応じてより複雑なものになっていくと考えていたから、新語を創出し使用することへの抵抗も少なかつただろう。

ただし建部は日本国内の読者だけを意識していたわけではなく、あるいはそれ以上に、西洋人の読者を意識していた。やや時期は下るが、建部は「日本人独創の社会学」（建部, 1913）という小文で、加藤弘之の独文による著作と穂積陳重の英文による著作に言及したのち、以下のように述べている。

先輩の社会学に關係した纏まつた著書としては、又価値ある著述としては、此の二書だけである、予は仏文で自著の項目だけを発表した事があるが、吾々後輩は欧米人との思想の交換の為め、まだ之ぞとしたものを発表するまでの機運に至つてゐない、其の研究の成果は之を将来に期すべきもので、今日は別に之と述ぶべき程の事は無い、且つ日本の学術界では、理科、医科、工科の如きは、それぞれ外国語で紀要が出てゐるが、社会学や哲学、史学、文学等には是までは其の機関が無かつた、従つて如何に立派な学説があつても、日本人では之を発表することが出来ない、西洋の雑誌にでも投書する外に道が無い、しかし此の機関も最近吾々の方面にも出来ることになつたから、之も世界的に日本の学界の進んで行く一階梯と見ることが出来る（建部, 1913, p. 37）

明治維新以降、西洋に出自を有する学問を、時には西洋語によって学ばざるを得なかつた青年たちのなかには、こうした一方的な受容に屈辱感を覚える一方で、これを西洋への知的挑戦の契機として解釈することで屈辱感を払拭しようとする者が少なからず存在していた。彼らにとって西洋諸学や西洋語に習熟することで西洋との研究競争に参入し、新発見の栄誉を獲得することは、日本の地位を高からしめるうえで意義のあることだと見なされていたのである（岡本, 2011）。建部もまたこうした意識を共有しており、社会学の成果を外国語

で、西洋に向けて問うことの価値は彼にとって自明のものであった。『普通社会学』においても次のように述べている。「今既著〔博士論文〕を校訂して之を公にする、小には以て我学界に、大には以て世界の斯学界に薦めて、聊か斯学界研鑽者の一員たるの責務に違はざらむことを期するの徵旨に他ならず」(建部, 1904a, p.序 6)。

ただし、日本の学問、特に人文・社会科学が置かれた状況をみれば、直ちに「世界の斯学界」に日本人の研究成果を問うことの困難も明らかであった。だからこそ、建部はまず項目一覧だけでも仏文で書くことで、西洋人に対して、日本人が社会学研究に取り組んでいることを知らしめようとする。先にも触れたが、『普通社会学』の本文では「一切の外国語を排斥」することがうたわれている。その一方で、巻末には仏文の項目一覧が掲載されており、

「国語」と「世界の斯学界」への意識が共存する格好となっている。また、建部は留学から帰国すると東京帝国大学教授に就任し、自身や教え子らの研究成果を「社会学論叢」として次々と刊行していくのである⁸、これらも本文はすべて「国語」によって書かれ、巻末には仏文による項目一覧が付されるという『普通社会学』と共に構成をとっている。本文が「国語」によって書かれた著作が西洋人によって実際に読まれるとは、建部も考えなかつただろう。しかし、これらの著作を出版することは、日本国内においては「国語の独立」「学問の独立」をもたらすという点では意義のあることであったし、西洋に対しては日本人が社会学研究に取り組んでいることを知らしめ、将来日本の社会学が世界規模の知的競争に参入するための一階級になると建部は考えたのではないだろうか。

このように、建部というひとりの人間のなかで、日本の独立を維持するためには「国語」で学術書を書くべきだという意見と、外国語によって研究成果を「世界の斯学界」に向けて発信することが日本の進む道だという意見がせめぎ合いつつ共存しているという点に、明治維新以後の日本の文化的位置が集中的に示されているように思われる。不平等条約の改正交渉を通して明らかとなったように、日本が西洋諸国と対等な立場に立つためには、西洋諸国から文明的な（実質的には西洋的な）国として承認を受けることが必要であった。西洋に出自を有する諸学を学び、国際的な知的競争に参入しようとする動向もそうした国家的課題と無関係ではあったわけではない。ただしその参入は決してスムーズに進んだわけではなかったし、西洋諸学や西洋語を学ぶことを強いられているという感覚も存在し続けたから、それへの反発が日本の文化的特殊性や西洋文明の侵略性の強調というかたちで表出することも避けがたかった。建部の場合、どちらかと言えば後者に傾きがちであり、日露戦争の勃発によって西洋文明の侵略性に対する認識が確定的なものになると、これへの警鐘を鳴らすナショナリズムの思想家としての立場を確かなものとしていく。

⁸ それぞれの著者と書名・刊行年は以下の通りである。第1巻：建部遜吾『戦争論』(1906年)、第2巻：小林照郎『日本之社会』(1907年)、第3巻：江部淳夫『文明論』(1909年)、第4巻：今井政吉『婦人と社会』(1911年)、第5巻：加地歌三郎『社会發達論』(1911年)、第6巻：今井政吉『社会本位と個人本位』(1912年)。建部以外の著者はいずれも建部の主宰する社会学講座の出身者である。

3 日露戦争と『戦争論』

1901（明治 34）年 10 月に留学から帰国すると、建部の文筆の領域は多方面に拡大し、社会学者としての立場から政治・国際関係・宗教・文化などに関するさまざまな評論を諸雑誌へと精力的に発表している。また、それとともに陸羯南・三宅雪嶺ら国粹主義を掲げる人々との親交を深めていった。

本節では『戦争論』を中心に、建部の帰国から日露戦争前後にかけて展開された国際関係論を検討する⁹。また、彼の国際関係論の形成に大きな影響を与えた同時代の社会学者の所説についても言及し、建部がその議論をいかに受け止めたかについても論じる。

3-1 『戦争論』の内容

建部の名が広く知れわたる契機となったのは、戸水寛人・富井政章・小野塚喜平次ら学者グループが政府に日露開戦を求める意見書を提出した、いわゆる七博士建白事件である。建部は「七博士」に小野塚喜平次と入れ替わるかたちで加わり、早期開戦を強硬に主張した¹⁰。かかる主張の背景には、戦争はロシアを「專制社会より開明的社會に進化するの大機運を促す所」であるとする義戦論的な発想に加え（建部, 1902, p. 426）、「武装的平和ほど不廉なる者之無候」という見方があった（建部, 1902, p. 429）。建部はまた、『日露開戦論纂』に収録された談話のなかで過剰人口問題を取り上げ、マルサス主義的な観点から領土の争奪戦が生じることを必然と見なし、日露開戦を正当化している（蔵原編, 1903）。

また、戦争中には戦場となった「満州」への鉄道敷設や言語・宗教政策による勢力扶植を主張し（建部, 1904b）、持久戦は「其の戦術戦略殆ど常時の軍隊的運動と大差なきが故に」講和を急がず占領地の経営を進め、韓国・満州のような「交戦両国間の合意協諾を以てすべからざるが如き種類の問題」の解決を図るべきであること、具体的には東部シベリア・黒竜江省の鉱物資源を列挙し、「久戦的経営」（戦争と占領地経営を並行して進めること）を目指すべきであると主張している（建部, 1905b, p11）。周知のように 30 年ほど後の第二次大戦期には戦争と資源獲得を結びつけることは当然の発想となるが、日露戦争期にも一般的であったとはいはず、この点で建部の先見性を認めることは可能であろう¹¹。

ともあれ建部は早期開戦を唱えたのみならず、講和条約の締結を批判する学者らの急先

9 『戦争論』については（春名, 2015）のなかでも触れられているが、詳細な検討はなされていない。

10 七博士建白事件を含む日露開戦の経緯については多くの先行研究が存在するが、七博士そのものを主題とした研究はほとんど存在しない。

11 このような主張には、ノヴィコフ『人間社会競争論』からの影響がみられる。「経済的戦争も亦一の生産なりと為し、生産機関の要素を具ふと為せるはノヰコフなり。氏は軍将は企業家なり、武器糧食は資本なり、兵士の努力は勤労なりといへり、亦学界の珍とするに足る」（建部, 1906, 148）。ノヴィコフについては後述する。

鋒となり、これを政府が抑えようとして生じた戸水事件においてもきわめて強硬な態度を取った。こうした態度の背景には、戦争の形態が古典的な短期決戦型の制限戦争から、長期にわたる総力戦へと移行しつつあり、日本もまたそれに適応しなくてはならないという問題意識があったと見られる¹²。日露戦争中に東京帝国大学で行った講義をもとにして書かれ、講和の翌年に出版された『戦争論』(建部, 1906) からは、かかる問題意識を背景として、自らの経験した日露戦争を理論的に捉えようという野心を読み取ることができる。

『戦争論』は全体で約 380 頁の著作であるが、第一篇「序説」では社会学による戦争研究の必要性が、第二篇「戦争の起因」では「動物界の戦争」「人種的戦争」「宗教的戦争」「政治的戦争」「経済的戦争」「文明的戦争」という戦争の諸類型が、第三篇「戦争の効果」では戦争が人口・身体・智能・道徳・政治・経済に与える影響が、第四篇「戦争防遏策」では古代ギリシアから現代までの西洋の平和思想が、第五篇「戦争の将来」では戦争が大規模かつ複合的なものになるという見通しが、それぞれ語られている。

全体の基調を成しているのは社会進化論の発想である。すなわち戦争も社会現象であり、そこには宗教・道徳・経済・政治など多様な要素が含まれると共に、全体として「進化」していく。「動物界の戦争」から「文明的戦争」へというのがその方向性となるが、ただし「社会の進化に隨ひ、漸次前なるもの廃れて後なるもの興るに向ふは勿論なれども〔中略〕多くは右の数者の混淆せるもの」だという（建部, 1906, p. 66）。つまり、戦争の形態が「文明的戦争」に進化するといつても、それによって直接的な軍事力の行使（動物界の戦争）や、人種・宗教による対立が無くなるわけではないのだ、ということである。

このように様々な要素を併せ持つ戦争を研究することは、社会学の任務に他ならないと建部は主張する。なぜなら社会学は「有形なる経済的方面に止まらずして又無形なる道徳宗教の方面に通じ、而も個人性の偏廻、一社会一国家一国民性の特質等、学問上忌はしき悪影響を避けて、毎に其問題が値するだけに大規模なる研究を施すを以て要と為す」からである（建部, 1906, pp. 11-12）。つまり人間社会を包括的かつ客観的な立場から扱う社会学こそが戦争研究にふさわしい立場だという。

このように『戦争論』にはかなり多くの内容が詰め込まれているのであるが、同書の本質は分析の書である以上に警告の書だと言えよう。すなわち、戦争は軍事的・物質的な手段によってのみ行われるのではなく、宗教・政治・経済・文明といった多様な領域において行われる。将来の戦争はより大規模かつ複合的なものとなるであろうし、戦争を廃絶する有効な手段も見当たらないので、まずはこれらの多様な領域における戦争に勝ち抜くための準備をするべきだ、という警告を発することが本書の主眼である。たとえば第五篇では、将来の

12 1903年2月の講演で建部は「今日の文明国の中に行はるゝ所の戦争、文明の利器を以てする所の戦争はは中中单に突貫が上手だけでは最後の勝を制することは覚束ない話になってきた」と述べている（建部, 1907, p. 300）。かかる認識はプロップホ『未来の戦争』を読むことで形成されたが（建部, 1907, p. 298）、この点については後述する。

戦争はより大規模なものになり、戦争が社会に与える影響もより広大なものになるという見通しが示されているが、建部はこれを反戦論に結びつけることを回避し、「轻易に戦争を決行するの失計たるは勿論、一たび決行せる戦争に轻易の終局を与ふるは、亦実に戦争より近世的文明的価値を奪ひさる所以の失計たるを免れず」と結論している（建部, 1906, p. 363）。戦争が大規模化し社会への影響が大きくなることは、それだけ社会が戦争を通して発展する可能性も大きくなるということだから、簡単に止めてはならないということである。

さらに建部は、戦争の進化にともない、戦争は文明的となり、他の文明的事項と調和するという楽観的な見通しを示している。具体的には、第一に戦争中の残虐な行為が制限され、戦争が「人道的」となること、第二に国家や文明の諸事項が戦争によって傷つけられなくなること、第三に戦争が永続したとしても「戦争が国家社会の組織全般に影響すること漸く減じ、戦争の永続するも、これがために戦争的国家組織を生成し、若くは武人の跋扈を見、政治的自由の迫害を見るが如き危険、漸く減少す」ること（建部, 1906, pp. 364-366）。こうした見通しについては、講和条約に反対し「久戦的経営」を唱えた自身の日露戦争論との整合性が意識されているように思われる。

3-2 ブロッホ『未来の戦争』とノヴィコフ『人間社会競争論』からの影響

『戦争論』を執筆するにあたって、建部は以下の二冊の本をたびたび引用している。一冊は、ロシアの銀行家であり社会学者でもあるイヴァン・ブロッホの著作『未来の戦争』（独訳：*Der Krieg*）（原著 1898 年／独訳 1899 年）、もう一冊は、同じくロシア出身で、主にフランスで活躍した社会学者ジャック・ノヴィコフの著作『人間社会競争論』（*Les Luttes entre Sociétés Humaines*）（1893 年）である。

まずブロッホの『未来の戦争』についてだが、総力戦を予見した書物として名高い同書は、豊富な実例と統計を用い、未来の戦争はより大規模かつ熾烈なものとなり、それが社会に与える影響の大きさ故に戦争を起こすことは不可能になると結論づけている¹³。同書は各国語に翻訳されて全ヨーロッパの知識人からの注目を集めた上、特にロシア皇帝ニコライ二世を動かしたこと、ハーグ平和会議の開催につながることになった。建部は留学中に同書を読み、科学的・現実主義的な立場から反戦論を展開するブロッホの議論に強い印象を受けたようである。実際、雑誌『学鐙』の読書アンケートにおいて建部は、「十九世紀の最大叙述」として、カーライルの『フランス革命論』とコントの『実証哲学講義』と共に『未来の戦争』（独訳 *Der Krieg*）を挙げている（建部ほか, 1902）。宗教やヒューマニズムに基づく反戦論をほとんど評価しなかった建部であるが、同じ社会学者であり、豊富な統計や歴史上の実例を用いた「科学的」手法に基づいて反戦論を唱えたブロッホには、真剣に向き合う必要を感じた。

¹³ 『未来の戦争』の内容とその受容については（等松, 2005）も参照のこと。ただし建部のブロッホ受容については触れられていない。

じていたのであろう。建部の『戦争論』も「記述的方法」「統計的方法」「歴史的方法」「批評的方法」を組み合わせて戦争の過去・現在・未来を分析すると謳われているが（建部, 1906, pp. 41-60）、このうち統計的方法の先駆者としてブロッホが挙げられている。

ちなみに『未来の戦争』は全6巻という大部な書物であるが、結論部分にあたる最終巻のみ邦訳が民友社から刊行されている。ただし日露戦争に勝利した直後という世相を反映して、無署名の訳者からは歐州軍事事情に関する資料的価値が評価される一方、結論にあたる反戦論については「議論を以てするも、事実を以てするも、ブ氏〔ブロッホ〕の論理の薄弱なるは明白となれり」と辛辣な評価が下されている（ブロッホ, 1904, p. 序 2）。これに対して建部は、戦争が不可能になるというブロッホの結論を拒絶する点では上記の評価と同一の立場に立つのであるが、総力戦の惨禍に関するブロッホの警鐘を日露戦争の被害と照らし合わせとき、「是れ亦今回の戦役の明徴を与ふる所なり」と、彼の主張に一定の妥当性を認めざるを得なかった（建部, 1906, p. 183）。そこで建部は、ブロッホの主張を「従来のような軍事力のみに頼った戦争は不可能になるが、戦争そのものは形を変えて継続する」と読み替えていくことで、自らの主戦論との接続を図っていく。この読み替えの補助線となつたのが、次に取り上げるノヴィコフの著作である。

先述したように建部の『戦争論』は進化論を前提として、戦争の6つの形態として「動物界の戦争」「人種的戦争」「宗教的戦争」「政治的戦争」「経済的戦争」「文明的戦争」を挙げている。この分類に際して建部が参考にしたのがノヴィコフの『人間社会競争論』であった。ノヴィコフは「生理」(physiologique) 的な競争から「経済」(économique) 的な競争、そして「知性」(intellectuelle) 的な競争へと、生存競争のあり方が「進化」していくことを論じている。つまり腕力を用いた競争から経済力による競争を経て、学問や言語・政治・社会制度の優劣を競う競争へと「進化」していくという展望である。建部の分類はこうした分類を精緻化するとともに、「人種」「宗教」を加えることでノヴィコフの欧州中心主義的な視点に批判を加えたものと見ることができるだろう。ノヴィコフについては陸羯南が「国際論」(1893年)でいち早く紹介しており、建部がこれを読んでいた可能性は高い¹⁴。

ノヴィコフの議論は、西洋による非西洋の植民地化は文明発展の契機であるという前提に立っており、競争の手段が「生理」的なものから「知性」的なものへと進化するというアイディアは植民地化の暴力性に対する過小評価と表裏一体の関係にあった。陸はこうしたノヴィコフの発想を強者の支配の正当化に過ぎないものとして批判するとともに、西洋の「知性」的な手段による侵略への抵抗を呼びかけているのであるが、建部の場合もやはり文化政策を通した西洋への抵抗を訴えており、その意味では陸とおおよそ同じ解釈に立っていると言える。ただし建部は「知性」による競争すなわち「文明的戦争」それ自体は「文明における潜勢力の流動という一種の自然的現象」であり「理想的社会淘汰作用の一環の遂行

¹⁴ 「国際論」において陸がノヴィコフの議論をいかに消化したかについては、（本田, 1996）を参照のこと。

なり」とする立場に立っているので（建部, 1906, pp. 161–162）、陸のように「文明的戦争」という観念のイデオロギー性を批判しているわけではなく¹⁵、むしろ積極的に「文明的戦争」に参加し、これに勝ち抜くことを求めていると見るべきであろう。

2節でも見たように建部は、早くからキリスト教に対する警戒心を持ち、やがて西洋文明の流入全般を西洋による精神的侵略の方策とみる立場を固めていった。軍事的・物質的な領域においてだけでなく、学問や宗教のような文明的な領域においても西洋人に競争を挑まなければ独立は保てない。ノヴィコフを通して学んだ「文明的戦争」という観念は建部のこういった警戒心、すなわち学問や宗教もまた西洋人による戦争と植民地化の方法に他ならず、国民としての覚悟をもってこれらに取り組まなければ独立は失われるのだという恐怖心をより強める方向に働いたと言えよう。また、読者に対しても同じような恐怖心を与えることで「文明的戦争」への警戒を促すことが建部の狙いであった。

3-3 「文明的戦争」と「国体」

建部は「国体新論」と題した講演のなかで次のように述べている。明治時代の思想は第一期の欧化主義から第二期の国粹主義を経て、いまや第三期に入ろうとしている。西洋思想も第一期の欧化主義者が学んだものとは大きく様変わりしている。こうした変化に伴って注目が集まっているのが、第一期の欧化主義者が顧みなかった「国家についていへばナショナリテー、或は社会に付て云ひますればソシヤリテー、即ち従来使い來つた慣用の言葉で最も之に該当する言葉を求めるならば所謂國体の感念」であり、国家間ないし社会間の生存競争において「敵の死命を制する」有効な手段は「所謂デナショナリゼーション國体剥奪」であることが「今日歐州に於ける最も進んだる学者の定説」になっているという（建部, 1904c, pp. 11–13）。したがって「国体剥奪」に抵抗するため「国体の觀念」を鼓吹することが必要になるというわけだが、この際にノヴィコフ、あるいはノヴィコフを引用した陸羯南の「國際論」が念頭に置かれていることは間違いない。

ただ、建部の主觀としては、自らの議論は陸に代表される第二期の国粹主義にとどまるものではなく、その先を行く第三期に属するものであるから、やみくもな西洋文明の受容でも、やみくもな排斥でもなく、国家社会の別に左右されない事項であれば西洋文明を積極的に取り入れることを目指すということが唱えられている。もっとも西洋文明に対する是々非々の態度という点では建部と国粹主義のあいだに大きな違いがあったわけではなく、その意味では上記の主張には単純化のきらいがある。だが、「国体の觀念」を強調しつつ、それが単に日本の特殊性を唱えるだけの古めかしい議論と見られることを避けるためには、

¹⁵ ただし建部も、ノヴィコフが西洋とアジア諸国の文明的競争を肯定しつつ、「歐州同盟」を提唱し西洋の文明諸国による競争を抑止しようとしたことについては「人種的感情及び人種的戦争の惰性」を感じずにはいられなかった（建部, 1906, p. 96）。

西洋における最先端の学問を参照することが不可欠であった。

ともあれ、建部はこの「国体の観念」に具体的な輪郭を与え、それを鼓吹することが「文明的戦争」を勝ち抜く秘訣であると考えていた。そしてまた、建部は日本の「国体」には普遍的な価値があることを示すことで、日本が「文明的戦争」に勝ち抜くことの意義を証明しようとしていたように思われる。では、「国体の観念」をどこに探し求め、どのような点に価値を見出せばよいのか。建部が注目したのは、教育勅語と神道、そして戊申詔書である。

建部はまず、教育勅語について「賽銭は要らぬ、又甘酒は呉れぬ、日本国民に取りて教育勅語の如き教へを安心立命の位置と為し道徳上の着物とするが一番進んだものである」と、見ようによつては不敬ともとれる表現で教育勅語の世俗性・合理性を賞賛している（建部, 1903b, p. 5）。建部は、儒教に由来する世俗主義と進化論の両方から影響を受けたことにより、宗教は人心の統一や道徳的規範の提示といった機能だけを備え、それ以外の儀礼的要素を持たない簡潔なものへと「進化」していくという見通しをもつていた。こうした観点からすれば、教育勅語はもっとも進んだ宗教に他ならない。

同様の視線は、神道に対しても向けられた。「我が神道と日本の国体は密接不離の関係」にあり、その「神道を宗教として見ればたしかに超絶的の靈魂や、極楽などを認めないで立ち得る宗教である」が、同時に神道は「祖先崇拜」に基づく「無上の社会的統制力」を有しており、だからこそ「日進月歩の世運に調和順応して行くに、最も適當なる形式は神道である」という（建部, 1905c, pp. 148-149）。したがつて建部は、朝鮮・満州においても教育勅語や神道が教育の柱になるべきだと考えた¹⁶（建部, 1918）。

最後に戊申詔書は、個人の規範を示した教育勅語とは異なり、「社会国家」の規範を示しているとしたうえで、建部はその普遍的価値を高く評価する。「東西相倚り彼此相済シ以テ其ノ福利ヲ共ニス」という文言は、それぞれの文化的個性を活かして協同し「人間社会、ヒュウマニティと云うものを建設する」ことが各國の「天職」であり、地球上に多くの国や社会が存在するのは「相互に修羅の巷となり」「己の利益を図れという命する趣意ではない」という（建部, 1908, pp. 56-57）。このように建部は、「国体の観念」という文化的特性の問題をその普遍的な価値と結びつけることで、日本の特殊性に居直る議論から距離を取り、「国体」を保持することは独立を維持するための条件であり、また世界の公益に資するものであることを説こうとしていた。

ところで、建部は「文明的戦争」を通じた文明の淘汰を肯定しながら、同時にそれぞれの文明には固有の「天職」があると説いていたことになるが、そのことの矛盾が意識されていた形跡は見られない。また、建部が各國の「天職」を説くのはもっぱら西洋文明への対抗と

¹⁶ かかる主張は当然、異なる民族に対して「祖先崇拜」を説くことの有効性に関する疑問を惹起するが、建部は「日本の統治上に不都合でない限り」という断りを入れたうえで、朝鮮・満州では「其土地の先祖」である「産土神」を祭ることを提案する。建部にとって神道は、祖先崇拜に基づく社会統合という機能が重要なのであって、「何人を産土神と崇めるも一向差支ないことを信ずる」という（建部, 1918）。

いう文脈においてであり、日本以外のアジア諸国の「天職」に触れられることはない。明治期における国粹主義者の対外観を論じた中川未来は、西洋基準の価値観に文化的多様性を対置することで抵抗の姿勢を示した国粹主義の基本的枠組みは、アジアに対しては適用されず、かえって植民地支配を日本の「天職」として肯定することにつながったことを指摘している（中川, 2016, pp. 320-321）。先述したように建部自身はたびたび国粹主義を明治思想の第二期に、自らの社会学を第三期に位置づけて両者の違いを強調しているが、対外観という点ではむしろ国粹主義からの連続性にこそ注目すべきであろう。

建部において、日本の文化的個性や世界全体の文化的多様性といった要素が基本的には西洋文明への抵抗という文脈のなかで触れられていたのだとすれば、西洋諸国の圧力が緩み日本アジア進出が本格化する時期に入るとこれらの要素が後景に退き、戦争に勝ち抜くことそれ自体が目的化される傾向が強まるのは自然な流れであった。ただし、国内政治や国際関係に関する建部の議論はより具体的かつ豊富な内容を含むものとなり、政治思想史の観点から改めて検討するに値するのだが、この点については別稿を期すことにしたい。

4 おわりに

本論文では青年期の思想形成から日露戦争前後の時期まで、建部遼吾の社会学と国際関係論、そしてその基底にある対外観を分析してきた。

本論文が明らかにしたことは、以下の2点である。第1に、西洋文明による精神的侵略に対する危機意識を背景として、建部の対外観が形成されたこと。このような危機意識は儒学的素養をもつ知識人に広く見られたキリスト教への警戒心を引き継ぐものであったから、それ自体は珍しいものではない。だが、その危機意識を理論的に捉えるために彼が残した著作の数々にはいざれも真剣な思索の痕跡がうかがえるものであり、建部の主張に賛同するかどうかは別として、我々が明治期の知識人の抱いた危機意識を知るうえで格好の事例であると言えよう。この危機意識を背景とした建部社会学の基本的な狙いは、広義の政治教育に寄与する学知を提供することにあった。建部から見た国際社会の本質は絶え間ない戦争状態であり、社会学の役割はこうした国際社会と国内社会の連関を総合的に捉えるための視座を提供し、政治と学知のあいだに橋を架けることにあった。

第2に、建部は戦争形態の多様化を説き、軍事のみならず学術研究のような「文明的」な形態における戦争に打ち勝つことが重要だと認識したこと。この認識は彼の社会学に対し、「國語」や「國体」といった文化的特殊性への執着をもたらすとともに、かかる文化的特殊性を不可欠の要素とする社会学をもって世界の学界に挑戦しようとする開放性をもたらすという、両義的な影響を与えたと考えられる。建部社会学は研究史において「国家主義的」と形容されてきた。大筋ではその通りであるとしても、建部が国家に直接的な利益をもたら

きない社会学体系の構築と宣伝に多くのエネルギーを注いだ動機を理解するためには、まさにその「国家主義的」心情のもつ両義性に注目するべきではないだろうか。

以上の点を総合すると、建部は明治期の知識人、とくに国粹主義ないし国民主義的傾向をもつ人々に共有された対内的・対外的な危機意識を総合し、その思想的生産性を継承する、「戦争」を軸とした独自の文明論を構築した人物であったと評価することができる。このことは、明治の思想史の理解に対して、以下のような示唆を与えるだろう。

近年の科学史研究では、明治期の日本において直接的な実用性を志向しない基礎研究へと少なからぬ自然学者が参入した背景には、ナショナリズムに基づく西洋人への知的挑戦という動機があったことが指摘されている（岡本, 2011）。本論文が明らかにしたように、社会学者である建部もまた「学問の独立」という目的のもと、社会学体系の確立という西洋人と共通の課題に取り組み、また後進に対してもそうした課題に取り組むことを求めた。このことは、近代日本の学術研究においてナショナリズムが果たした役割の大きさと、それがいかなる对外観に基づいているのかを示していると言えよう。

また、建部は社会学こそが大日本帝国を改良するための鍵であるという信念をもち、のちに自ら政治へと参入していった人物であるが、彼を孤立した存在として見るべきではない。ほぼ同時代のイギリスにはオーギュスト・コントの社会学を基礎に大英帝国改造論を唱えたフレデリック・ハリソンライギリス実証主義者がおり、建部とも交流があった（Mitsunaga, 1992）。またドイツでは、化学者のウィルヘルム・オストヴァルトがやはりコントの社会学を踏まえた文明論およびドイツ社会の改良論を展開し、その動きは明治末から大正期にかけての日本の学問動向にも少なからぬ影響を与えている（猪原, 2021）。こうした社会学をめぐる国内外の動向を踏まえた思想史はいまだ書かれておらず、その点で建部社会学を検討することは明治期の思想史を再考するひとつの手がかりとなりうるだろう。

また、明治以降の日本が約10年おきに戦争を経験していることは周知のとおりであるが、これらの戦争をめぐる思想を明らかにすることも重要な課題である。戦争論の多くは帝国主義を正当化するイデオロギーとして機能したが、かかるイデオロギーもまた歴史的現実を構成する要素の一部であり、その詳細と変遷の解明には歴史を考察するうえで少なからぬ意義があるだろう。こうした視点から改めて建部が文明論のかたちをとて記した『戦争論』を読むとき、戦争思想の系譜において社会学が占める位置の大きさが示唆されているようと思われる。アジア・太平洋戦争中にも布川静淵『戦争の科学的研究』（1941年）や加田哲二『戦争本質論』（1942年）、岡村重夫『戦争社会学研究』（1943年）など社会学者による戦争論が陸續と現れるが、これらを含めた戦争思想史の構築は今後の課題としたい。

【参考文献】

- ・日本語文献

- 姉崎正治, 1974, 『新版 わが生涯』姉崎正治先生生誕百年記念会
- 井出文子・柴田三千雄編, 1984, 『箕作元八・滝歐「簞梅日記」』東京大学出版会
- 猪原透, 2021, 「明治・大正思想における熱力学的世界観——日本における「エネルギー論」受容を中心に」『立命館大学人文科学研究所紀要』129号
- 大道安次郎, 1968, 「建部遜吾」『日本社会学の形成—九人の開拓者たち』ミネルヴァ書房
- 岡本拓司, 2011, 「原子核・素粒子物理学と競争的科学観の帰趨」金森修編『昭和前期の科学思想史』勁草書房
- 川合隆男, 1999, 「建部遜後の社会学構想—近代日本社会学のひとつの底流—」『法学研究』72卷5号
- 蔵原惟昶編, 1903, 『日露開戦論纂』蔵原惟昶
- 幸田成友, 1948, 『凡人の半生』共立書房
- 左古輝人, 2000, 「初期の建部遜吾における儒学と社会学」『社会学評論』51卷1号
- 新明正道, 1967, 「建部遜吾—明治社会学の巨頭—」『越佐の生んだ日本的人物』新潟日報社
- 住家正芳, 2013, 「内村鑑三はベンジャミン・キッドをどう読んだか—社会進化論の影響の一断面—」『立命館大学産業社会論集』48卷4号
- 建部貞夫, 1935, 『蔵軒存稿』私家版
- 建部遜吾, 1891, 「日本男児の本色」『校友会雑誌』5号
- 建部遜吾, 1896, 「ヴィンセント氏社会学の綱領」『哲学雑誌』118号
- 建部遜吾, 1897, 「韻文進化論」『帝国文学』3卷5~11号
- 建部遜吾, 1898a, 「漢学研究の精神」『校友会雑誌』82号
- 建部遜吾, 1898b, 「語学者の急務」『帝国文学』4卷11号
- 建部遜吾, 1902, 『西遊漫筆』哲学書院
- 建部遜吾, 1903a, 「国際競争と帝国主義」『日本人(第三次)』
- 建部遜吾, 1903b, 「国際競争と道徳問題(承前)」『弘道』136号
- 建部遜吾, 1904a, 『普通社会学第1卷 社会学序説』金港堂
- 建部遜吾, 1904b, 「満韓の経営」『日本人(第三次)』213号
- 建部遜吾, 1904c, 「国体新論(承前)」『神社協会雑誌』第28号
- 建部遜吾, 1905a, 『普通社会学 第2卷 社会理学』金港堂
- 建部遜吾, 1905b, 「戦局持久の覚悟」『日本人(第三次)』412号
- 建部遜吾, 1905c, 「神道に就いて」早川恭太郎編『国のすがた 軍人読本』小笠原季太郎
- 建部遜吾, 1906, 『戦争論』金港堂
- 建部遜吾, 1907, 『静觀余祿』金尾金淵堂
- 建部遜吾, 1908, 『戊申詔書衍義』同文館
- 建部遜吾, 1913, 「日本人独創の社会学」『新公論』28卷5号
- 建部遜吾, 1918, 「進歩せる満鮮の国語教育」『大阪毎日新聞』(1月4日付)
- 建部遜吾ほか, 1902, 「十九世紀に於ける欧米の大著述」『学鎧』6卷56号

- 田村順三郎編, 1965, 『建部遜吾先生とその詩歌』 横越村
- 等松春夫, 2005, 「日露戦争と「総力戦」概念——プロッホ『未来の戦争』を手がかりに」『軍事史学』41巻1・2号
- 戸田貞三, 1953, 「学究生活の思い出」『思想』353号
- 中川未来, 2016, 『明治日本の国粹主義思想とアジア』 吉川弘文館
- 林恵海, 1957, 「日本社会学の発展」 日本社会学会編『教養講座 社会学(改訂増補版)』
- 春名展生, 2015, 『人口・資源・領土—近代日本の外交思想と国際政治学—』 千倉書房
- プロッホ, ジュアン, 1904, 『近時の戦争と経済』 民友社
- 本田逸夫, 1996, 「明治中期の「国際政治学」——陸羯南「国際論」と Novicow J., La politique internationale をめぐって——」『法学』59巻6号
- 松田宏一郎, 2008, 『陸羯南』 ミネルヴァ書房
- 松本潤一郎, 1932, 『社会学——学説と展望』 浅野書店
- 光永雅明, 1997, 「「人類」と帝国——イギリス実証主義者たちの大英帝国論、1857~1902(前・後)」『神戸市外国語大学研究年報』33・34号
- 無署名, 1898, 「建部遜吾氏の洋行」『哲学雑誌』138号
- 無署名, 1899, 「建部文学士の来信」『哲学雑誌』143号
- 山下重一, 1983, 『スペンサーと日本近代』 御茶の水書房
- 渡辺浩, 2005, 「『教』と陰謀——『国体』の一起源」 渡辺浩・朴忠錫編『日観共同研究叢書11 韓国・日本・「西洋」——その交錯と思想変容』 慶應義塾大学出版会
- ・欧文文献
- Bloch, J. von. 1899. *Der Krieg. Der zukünftige Krieg in seiner technischen, volkswirtschaftlichen und politischen Bedeutung.* 6 Bände. Puttkammer & Mühlbrecht, Berlin.
- Novicow, J. 1893. *Les Luttes entre Sociétés Humaines*, Ancienne Librairie Germer Bailliére et Cie Félix Alcan, Paris.
- Mitsunaga, M. 1992. The English Positivists and Japan. *Zinbun*, 26, 45–81.

【謝辞】本論文の一部は日本思想史学会 2021 年度大会での報告を基にしている。大会運営委員および当日の参加者各位にお礼申し上げます。

猪原 透 (いのはら・とおる)

1986 年生まれ。立命館大学客員協力研究員、関西学院大学などで非常勤講師。専門は近代日本思想史・社会科学史。主な論文は、「米田庄太郎の社会哲学」(『日本思想史学』51号)、「「国家主義の理想」を求めて——牧野英一の思想形成」(『日本思想史研究会会報』37号)など。加藤周一現代思想研究センターの研究員として、戦後日本思想についても研究を進めている。